【研究ノート】

精霊憑依研究における コンテクストと視点の問題

―マリの首都のソンガイによる精霊憑依の実践における精霊ハウカの位置づけを巡って―

内田　修一

奈良県立大学　学術研究員

要　旨

本論考は、マリの首都バマコでソンガイ移民たちが継続してきた精霊憑依の実践を対象に、主に植民地期に出現した精霊ハウカに関する事例をとりあげ、この精霊に関する彼らの認識と彼らにとって重要な実践のコンテクストを明らかにすることをとおして、実践者の視点を重視した視座の構築を試みるための試論である。

既存の研究では、植民地体制を構成していた地位や役職から着想された「ハウカ」と呼ばれる「白人」の精霊のグループは、その信奉者たちが当時の政治体制から敵対的とみなされたという歴史的コンテクストとの関連で解釈されてきた。しかしこうした解釈にはバマコの実践者たちの認識には合致しない等の問題がある。実践者の視点を重視した視座の構築の試みとして、本論ではシステムの視点を重視するネオ・サイバネティクス論の基本的な考え方を参照して、実践者たちの経験や認識に応じて有意なものとなる精霊憑依の実践は、それをつうじて彼らが自身の認知世界を構成し続ける再帰的で自律的な過程としてとらえうると想定し、この観点から彼らにとってハウカがどのような精霊であり、重要な実践のコンテクストはいかなるものかを考察した。

ソンガイの世界観と事例の分析によって、彼らの世界観に独特な仕方で統合されているハウカは植民地体制下での出現という歴史的状況とは全く関連づけられていないこと、並びに、人とハウカの相互行為においては、実践者各自の精霊と霊媒との相互行為の独自の経験、及び人（ソンガイ）と精霊の間での社会関係とそれに付随する道徳性の類似を特徴とするソンガイの世界観に関するコンテクストがいかに重要であるかが明らかになった。これらのコンテクストは、実践者各自の実践の一貫性の確保とアクター（人と精霊）の間の様々な紐帯の形成に関与しているために、出身地、居住地区、精霊憑依の知識や経験に関して様々なソンガイ移民たちが実践を共にする都市環境において、いっそうの重要性を有していると考えられる。

かくして本論は、新しく出現した精霊に関して既存の研究が政治的状況などのマクロなコンテクストを重視して実践者の視点を軽視する傾向があったのに対して、実践者たちにとって有意なコンテクスを明らかにし、これらコンテクストが都市環境において有している意義を解釈した。それによって本論は、観察者の視点と実践者の視点に応じて異なるコンテクストを明確に区別し、実践主体にとっての意味と相関した主観的なものとしてコンテクストをとらえることで、より実践者の視点に即して精霊憑依の実践を理解する可能性を示すことができた。

キーワード：ソンガイ、精霊憑依、コンテクスト、再帰性、都市、ネオ・サイバネティクス

Contexts and Viewpoints in Studies on Spirit Possession:

with a Focus on the Position of Hauka Spirits in Songhay Spirit Possession Practices in Bamako, Mali

UCHIDA Shuichi

Nara Prefectural University

Summary

This essay addresses spirit possession practices that have been continuously conducted by Songhay immigrants in the capital city of Mali focusing on the Hauka spirits that appeared during the colonial period. The purpose of this study is to clarify the Songhay immigrants' recognition of these spirits and the contexts which are important to them when practicing spirit possession, to construct a theoretical perspective taking into consideration the viewpoints of spirit possession practitioners.

The group of spirits called "Hauka" by Songhay people, which mimic roles and positions in the French colonial system and which are considered as "white", has been interpreted in prior studies in relation to the historical context in which followers of the spirits were viewed to be hostile to the political system at that time. However, such interpretations, which place considerable importance on the historical context, do not match practitioners' conceptions about these spirits in Bamako. In order to establish a theoretical position that may help explore the practitioners' viewpoints, this paper, referring to basic concepts of the neo-cybernetics, assumes that the spirit possession practices become significant in accordance with the practitioners' experiences and cognition. From this standpoint, these parctices should be considered as a recursive and autonomous process through which practitioners recreate their own cognitive world.

An analysis of Songhay's worldview and case studies show that Hauka spirits are integrated into practitioners' worldview in a particular way and are not at all related to the historical context. The analysis and case studies also demonstrate the significance of the following contexts in interactions with Hauka spirits: those relating to the practitioners' own experiences and those relating to the Songhay worldview characterized by the fact that humans (the Songhay people) and spirits have similar social relations and morality. These contexts are all the more significant in an urban environment, where Songhay immigrants who engage in spirit possession practices are diverse in terms of their native place, residential area, and knowledge and experiences of these practices, since the contexts support the consistence of interactions of each practitioner with mediums and spirits, and the creation of ties between the actors (humans and spirits).

This paper, thus, clarifies the contexts that are significant to practitioners and expresses interpretations of their importance in the urban settings, while prior academic literature has attached importance to macro-contexts, such as political situations, and has under-evaluated the practitioners' viewpoint regarding the new spirits. Therefore, by making a clear distinction between the perspective of the observer and that of the practitioner and considering the context as subjective and correlative in relation to the significance for practitioners, the paper presents the possibility of approaching the practices of spirit possession in a way more matching the viewpoint of the practitioners.

Key words: Songhay, spirit possession, context, recursivity, city, neo-cybernetics

はじめに
第1章　本論の視座
1-1　先行研究の検討
1-2　ネオ・サイバネティクスと視点の問題
第2章　バマコにおけるホッレイ・カルト
2-1　二元的世界観
2-2　精霊ハウカ
2-3　バマコでの実践の特徴
第3章　事例の検討
3-1　実践の経験主義的傾向
3-2　精霊－霊媒
3-3　2つの相互行為のコンテクストの錯綜
3-4　考察：大都市における秩序
おわりに

はじめに

本論は、マリの首都バマコで同国北部から移住して来たソンガイ人たちが維持してきた精霊憑依の実践を対象に、主として植民地期に出現した精霊に関する事例をとりあげ、彼らにとって重要な実践のコンテクストがいかなるものであり、そこでこの精霊がどのような存在として認識されているかを明らかにすることをつうじて、実践者の視点を重視する視座について考察を試みるものである[1)]。

人類学における精霊憑依研究では、被憑依者の心的葛藤や意識の状態（cf.「変性意識状態（altered state of consciousness）」）に注目して通文化的な観点から研究対象を論じようとするそれまでの傾向に対して、1970年代後半以降、地域に特有の文脈が重視されるようになった。その後こうした傾向は、人類学における他領域の研究と連動して、とりわけ精霊憑依を近代化や植民地化などの相対的にマクロなコンテクストとの関連で論じる一群の研究へと発展したと言える。この潮流はサヘル地域に関する研究にも明瞭に反映されており、後述するように、西アフリカの一部がフランスによって植民地統治されていた時代に出現した「白人」の精霊は、既存の研究では植民地化という歴史的状況との関連で論じられてきた。しかし筆者の調査[2)]によれば、ソンガイ人が「ハウカ（Hauka）」（ハウサ語で狂気を意味する）と呼ぶこうした精霊は、実践者たちの認識においては過去の政治的状況とは全く関連づけられておらず、彼らの世界観の中に独特な仕方で統合されている。周知のように人類学では研究対象に関わる人々の視点が重視され、文化・社会を内部から描き出して理解することが目指されてきた。かくして一部の既存の研究には、精霊憑依をコンテクストとしての外的状況と関連づけて解釈しようとする観点と、アクターの視点を重視する観点の間の齟齬を指摘できる。

この齟齬の問題は、観察者と実践者の間での視点の違いの問題と言い換えることができる。精霊憑依の実践をどのようなコンテクストに位置づけるか、すなわち考察対象が意味をなすいかなるコンテクスト[3)]に位置づけるかは、観察者の関心や研究対象の切り取り方、すなわち観察者の視点と密接に関わっているはずだからである。この見地から、本論では精霊憑依に関する先行研究の批判的検討と、マリの首都バマコで観察されたソンガイ移民の精霊憑依の実践に特徴的な点についての分析を一貫した視座から実行するために、システムの視点を重視することを特徴とするシステム論、ネオ･サイバネティクスの基本的な考え方を参照する。

ネオ・サイバネティクス論は、認知主体としてのシステム（具体的には生物など）がその作動において外部に対して閉鎖的に、自身の認識や経験などに基づいて自身を維持し、それと同

時に自らの世界を構成するという事態をシステムの視点から捉えようとする[4)]。あくまで自らにとっての意味（significance）あるいは価値に他ならない「情報」を外部環境に由来する刺激などをきっかけに生成させる認知主体の生存とその世界の在り方は、相関的である[5)]。精霊憑依に関わるアクターと彼らの実践は、外的状況に対して閉鎖的で自律的なシステムとその再帰的な作動に模して考えることができ、このように実践者の視点をとることは、彼らにとって精霊憑依が有している意味を考慮してこの実践を理解するために有用であると想定される。

もっとも、精霊憑依研究において、相対的にマクロなコンテクストが重視されるようになった背景には、特定のローカルな文化や社会の部分としては把握できない、これらを超えた歴史的あるいは同時代的な動態と関連した研究対象の相に焦点をあてるという意義があったと考えられる。また、人類学では研究対象に関わるアクターの視点が重視されてきたが、これらアクターの認識に研究者が調査や分析から得た知見が常に合致していなければならないとは限らない。さらに、研究対象を具体的なコンテクストに位置づけることは、研究対象に関連した人々の視点の重視と同様に、フィールドワークに基づく人類学研究の基本的な方法でもある（竹沢 2007: 53–54）。実際のところ本論は、考察対象であるソンガイの精霊憑依の実践を十分に記述し、理解するには、それが移民たちによって異郷の大都市で維持されているという状況は無視できないと考える。そのため最後の「考察」(3-4) で、それまでに得られた知見を都市環境という背景と関連づけた解釈を提示する。

かくして本論は、実践者たちの視点を重視する見地から、マリの首都バマコでソンガイが維持してきた精霊憑依の実践を対象に、実践者にとって有意な実践のコンテクストがいかなるものかを明らかにすることを目的するが、その一環として精霊ハウカがどのように異郷の大都市における実践に統合されているかを示すことも試みる。この作業をつうじて、外部環境に対して自律的な実践主体にとって主観的なものとしてコンテクストをとらえる本論考の視座の精霊憑依研究における有効性が検証される。

以下、第1章では特定の歴史的・政治的状況との関連で新しく出現した精霊が、人類学研究でどのように考察されてきたかをサヘル地域の事例に関して検討し、次いでネオ・サイバネティクス論の基本的な考え方を参照して、本論の視座を提示する。第2章では、ソンガイの精霊憑依カルトとバマコでの実践の特徴に関して、以降の事例の記述と分析の前提となる情報を提示すると同時に、精霊ハウカがソンガイの世界観にいかに位置づけられているかを略述する。続く第3章では、再帰性の概念を手がかりに、実践においてどのような相互行為のコンテクストが実践者にとって重要かを事例に基づいて分析し、次いで得られた知見を異郷の大都市というコンテクストに位置づけて考察を纏める。本論の立場は、実践者の視点を重視している一方で、観察者（研究者）の視点から研究対象を何らかの状況ないし背景と関連づけることを否定するものではない。本論での事例の分析によって得られた知見をより良く把握するには、こうした関連づけの作業は有用であると思われる。

第１章　本論の視座

1-1　先行研究の検討

とりわけ1970年代後半までの精霊憑依研究では、「変性意識状態」、「エクスタシー」、「トランス」などのキーワードに表れているように、被憑依者の意識や心理の状態が研究対象を特徴づけるものとして注目されてきた（Bourgignon (ed.) 1973; Monfouga-Nicolas 1972; ルイス 1985）。こうした観点からの研究には、精霊憑依を精神的不調に対処するセラピーと同一視する傾向や、様々な事例を通文化的に理解しようとする傾向があった。それ以後は、被憑依者の心理や意識

の状態への関心が失われたわけではないが、先述の傾向とは対照的に、特殊な地域的・文化的コンテクストを重視して精霊憑依を理解しようとする研究が主流を占めるようになっていった（Crapanzano 1977: 20）。こうした傾向はその後、人類学における歴史、政治並びに世界経済などのより包括的なプロセスへの関心の高まりを背景に、植民地化などの政治史、近代化、グローバリゼーションなど外的状況としてのよりマクロなコンテクストを重視する傾向へと展開した（Behrend & Luig (eds.) 1999; Comaroff & Comaroff (eds.) 1993; 古谷 2003）。かくして、歴史や新しく生じた時代の趨勢、あるいは同時代の文脈に精霊憑依を位置づけ、それらとの関係でこれを読み解いたり、その動態を明らかにしようとしたりする傾向は、この研究分野を活性化させてきた（Dawson (ed.) 2011; Hüwelmeier & Krause (eds.) 2010; Masquelier 2020）。

西アフリカのサヘル地域に関する精霊憑依研究に目を転じると、ニジェールのハウサ人のボリ・カルトに関して、精霊は社会的状況に関する「シニフィアン」（意味するもの）であると主張したエシャール（Nicole Echard）の研究は、上述の傾向を端的に示すものとして位置づけられる。彼女によれば、新しく西方からやって来たとされるバッタの精霊は、首都ニアメを含むニジェール西部に居住するザルマ人が政治的に優位な地位を占め、東部に居住するハウサ人を搾取しているという政治的状況を示す「シニフィアン」に他ならず、コードのように機能するこの精霊＝シニフィアンは実践者たちが状況について「思惟」し、「表現」し、「異議申し立て」することを可能にするものである（Echared 1992）。

同様にニジェールのボリ・カルトの事例を研究したマスクリエ（Adeline Masquelier）は、近代化、植民地化やイスラームの影響力の増大などに対する「抵抗」という一貫した観点からボリ・カルトを論じている（Masquelier 2001）。1920年代半ばにニジェール西部のソンガイとハウサが混住していた地域で、植民地軍の軍人などを模倣した精霊が憑依した若年の霊媒たちが、植民地制度に組み込まれた地域の行政チーフに対して敵対的な活動を活性化させ、体制による介入を招いたことが知られている。ハウサが「バブレ」と呼び、ソンガイが「ハウカ」と呼ぶこれらの精霊は、当初は既存の精霊憑依カルト（ソンガイのホッレイ・カルト[6]、ハウサのボリ・カルト）には統合されておらず、若年者たちはこうした彼ら独自の抵抗運動を展開したとされている（Echard 1992; Fuglestad 1975; Krings 1999）。そのため、これら「白人」の精霊の出現という出来事と当時の若年者たちの活動は、彼女の主張を裏づける好例であるようにみえるかもしれない。

こうした精霊憑依の政治的解釈を提示した研究（上述のエシャールの研究を含む）を批判的に検討した論文を発表し、これらが「政治的過剰解釈」に陥っていると結論したソンガイ研究の泰斗オリヴィエ・ド・サルダン（Jean-Pierre Olivier de Sardan）が指摘しているように、少なくともソンガイの事例では、精霊は一般に人間に害をもたらすと同時に加護を与える両儀的な存在である（Olivier de Sardan 1993）。この指摘がボリ・カルトに関しても妥当であるとすれば、エシャールの政治的解釈は実践者たちの認識には合致していないと推察される。この観点からは、精霊が「シニフィアン」であるというメタファーには、エシャールの解釈と実践者たちの認識の違いを曖昧にする修辞的な効果があるように思われる。また、マスクリエの論じた「白人」の精霊が出現時に当時の政治体制に対する抵抗という意味合いを持っていたとしても、その後の時代にこれらの精霊が両儀的な存在として人々と相互行為しているとすれば、同時代の事例に関しては「抵抗」という解釈は妥当性を欠くのではないかという疑念が生じる。実際のところ、この精霊に関する彼女の議論が植民地期のエピソードを中心としていることは見逃せない。

ソンガイの事例に関しても、植民地期に出現した一群の精霊ハウカは、基本的に当時の資料に依拠して、植民地体制や西洋にソンガイの実践者たちを対置する構図において解釈されてきた（Rouch 1989; Olivier de Sardan 1982, 1984）。こうした研究のなかには、ニジェールに現れた「白人」の精霊を、フランス人が持つ不可解な「力」を我有化する試みとして理解しようとするものがある（Fuglestad 1975）。ユーモラスに誇張された所作で植民地体制を構成していた地位・職種の人々を模倣するハウカを、風刺的な「文化的抵抗」として論じ（Stoller 1984）、その後にニジェールの政治史との関連において改めてこの精霊を論じた著書を発表しているストーラー（Paul Stoller）も、基本的にはこうした「力」の我有化としてハウカの出現をとらえている。彼によれば、植民地体制に対抗するために植民地軍を模倣して創造されたハウカは、軍人を模した暴力的な「エートス」あるいは「美学」を体現していた。これらの「価値」は「対抗的記憶（counter memory）」として霊媒たちに「身体化」されて受け継がれ、彼自身がハウカの霊媒だったと噂されたセイニ・クンチェ（Seyni Kountché）によって、1970年代から80年代にかけて、彼の軍事独裁体制において活用されたのである（Stoller 1995）。

しかしながら、この著作を辛辣に批判しているオリヴィエ・ド・サルダンが指摘しているように[7]、ハウカが具体化しているとされる「力」と「冷酷さ」はハウカに固有のものではなく、古くから存在している精霊とも共有されており、また、ハウカは特殊な「価値」（軍人的な「エートス」）を体現しているというよりも、他の精霊と同じ「モラル」[8]に依拠している（Olivier de Sardan 1999）。筆者の調査によれば、粗暴な振る舞いがハウカ全体の典型的な特徴であるかのように語られる傾向は確かに実践者たちの間にみとめられるが、全ての精霊が人智を超えた力を持ち、かつ無慈悲に人間に害を為す存在であるという意味では、「力」と「冷酷さ」がハウカだけの特徴とは言い難い。さらに、ハウカは他の精霊と同じような道徳性、すなわち社会関係に付随する規範・価値に準拠しており[9]、また人々に対して同じような要求（供物、供犠、儀礼など）をするため、「価値」の点においても、他の精霊との違いはストーラーが主張するほど明瞭ではない。

ストーラーは地域の植民地支配という状況から新しい精霊が独特な仕方で生み出され、それ以降、精霊憑依の実践者たちに受容されてきた過程を政治史に沿って描き出そうとした。「対抗的記憶」の「身体化」とは、ハウカの歴史的起源からポスト植民地期に至るまで連続しているとストーラーが想定するものを表すための表現であると考えられる。しかしながら、次に述べるように、バマコでは実践者の認識においてハウカは植民地期とは関連づけられていない。「対抗的記憶」は当事者の意識を超えたものだという反論が想定されるが、ストーラーが政治的コンテクストとの関連を追求して提示したハウカ像は、少なくとも後の時代の実践者たちの認識から乖離しているとは言えよう。

以上のように、歴史的状況との関連で研究者の関心をひいてきた新しい精霊の出現は、この状況に対する精霊憑依の実践者たちの対応としてとらえられてきた[10]。ニジェールで出現した「白人」の精霊（バブレ、ハウカ）に関しては、それが「抵抗」として出現したという解釈は、当時の状況に議論を限定すれば妥当であるかもしれない。しかし筆者の知る限り、「他所から飛ばされてきたハウカたちをドンゴ（稲妻の精霊）が養子にした」、あるいは、「精霊の世界で争いが生じた時にドンゴがハウカたちを助けた」などのエピソードを介して、マリではハウカは従来の精霊体系（pantheon）に組み込まれている[11]。これらのエピソードとここまでの先行研究の検討を考え合わせると、新しく現れた精霊の出現当時の状況との関連を重視した解釈（植

民地体制に対する抵抗など）は、少なくとも別の地域や別の時代の実践者の認識を重視するならば、一般化することは困難であると言える[12)]。

最後に、特定の歴史的状況に由来する精霊に類した存在やモノが独特に人々の世界に組み込まれているという点でハウカの例と類似しているため、ここで言及するに値すると思われる例を、別の地域に関する研究から挙げておきたい。エドゥアルド・コーン（Eduardo Kohn）が記述しているところによれば、エクアドルのアマゾン川上流域に住む先住民ルナが語る植民地期に由来する様々な形象は、人々のパターン化された世界観に無時間的に（非歴史的に）取り込まれている。「白人」は、地域で「重要な関係づけの手法」あるいは「形式」である捕食関係における対象化された獲物に対して、行為主体性に特徴づけられた狩猟者と類似した「主」として位置づけられており、白人のゴム農園の長やイタリア人司祭は「森の主」である精霊として人々の夢に現れる（コーン 2016: 352）。森のある精霊はかつてキリスト教の修道士たちが身につけていた黒色のローブを纏っており、また動物の主である精霊たちには、役人や聖職者に貢物をしなければならなかった時代のように、かつて地域で用いられていた交易用のビーズを提供することが求められている（*ibid.*: 317–318）。

実践者の視点を重視する観点から、ハウカがバマコではソンガイにとってどのような種類の精霊であると本論が考えるかは次章で記述する。ここではさしあたり、ハウカを含めた精霊の「モラル」や一般的な特徴（人智を超えた「力」を持ち、「非情」である）が、いわば歴史的時間とは別の位相にあるソンガイの世界観における精霊一般の在り方と密接に関わっていると考えられることを述べておきたい。

1-2　ネオ・サイバネティクスと視点の問題

「ネオ・サイバネティクス」は、オートポイエーシス論やこれを社会学に応用したルーマン（Niklas Luhmann）の理論社会学、グレーザーズフェルド（Ernst von Glasersfeld）のラディカル構成主義などの理論の総称として、文学研究者のクラーク（Bruce Clarke）とメディア研究者のハンセン（Mark B.N. Hansen）が提唱した名称であり（クラーク&ハンセン 2014）、日本で西垣通を中心に理論構築されている基礎情報学も含まれる。ウィーナー（Norbert Wiener）が構想したサイバネティクスにおける機械と生物が「観察された」システムであるのに対して、ネオ・サイバネティクスは「観察する」システムを対象とするとされる。すなわち、生物であればその生物を対象として観察するのではなく、自ら観察する主体をその内部の「局所的な視座」から把握しようとするのであり、「つまりそれは、外側からのシステム論ではなく、内側からのシステム論に他ならない」（西垣 2021: 47）。

この観点からは、観察する認知主体（生物）にとっての世界は客観的あるいは普遍的に存在しているものではなく、環境に埋め込まれた主体が得る「情報」は、あくまでもこの主体にとっての意味（significance）すなわち価値・重要性に応じて得られるものであり、それに応じてこの主体にとっての世界が構成される。かくしてこの主体が環境において生存することと自身の世界の構成は、不可分な仕方で相関している。

こうした認知主体の在り方は、再帰性、自律性、及び閉鎖性を特徴としている。再帰性は「自己言及性」とも言われ、上述のような「みずから構成した主観的な世界をもとに外部からの刺激を解釈し、主観的世界を内部的に改変し構成し続けていく」（西垣 2021: 38）ような循環的な因果性を指す。自律性は、こうした自己準拠的な主体とその認知世界の在り方は外部からの作用によって決定される「他律」的なものではないことを指す。そして、認知主体の視点からは外部を直に観察することはできず、またこうした主体とその認知世界は循環的な在り方をしているため、この主体の在り方に関して外部に対す

る閉鎖性を指摘できる。

こうしたネオ・サイバネティクスの観点を参照して、外的環境（例えば地域の政治的状況や、特定の精霊が特定の歴史的状況との関連で出現したという背景）を認知主体の外部環境と考えれば、認知主体として精霊憑依を実践するアクターたちは、彼らの視点においては上述の意味での自律性と閉鎖性を備えていると想定することで、彼らにとっての認知世界をこうした外部環境から区別することが可能になる。この観点からは、外部からの刺激は、あくまで実践者たちにとっての世界に応じて解釈される。

西垣らが強調するように、ネオ・サイバネティクス論の観点からは、情報とは何よりも生物にとっての価値や重要性という意味での「意味」に他ならない（西垣 2012; 原島 2022）。「情報」あるいは「意味」は外界に客観的に存在しているものではなく、認知主体の認識や経験と相関しているものである。そのため、実践者にとって有意なコンテクストがいかなるものかという上述の問いは、精霊憑依の実践のなかで、彼らにとっての「意味」（価値・重要性）が経験や認識との関係でどのように生じているかという問題と言い換えられる。この観点では、コンテクストとは実践者にとっての意味と相関した主観的なものであるはずである。こうした主観的有意性の考察のために、ホッレイ・カルトの実践者たちがこの実践を継続していく過程における、関連した経験や世界観（認識）への準拠が明白な局面、すなわち再帰性が明白な場面を以下で事例として検討する。

第２章　バマコにおけるホッレイ・カルト

2-1　二元的世界観

では、ソンガイのホッレイ・カルトの実践が依拠している世界の在り方とは、どのようなものだろうか。

本論で言う「精霊」はソンガイ語では「ホッレイ（holley）」（sing. holle）と言われ、この総称に後述するような様々な精霊のグループが含まれる。先行研究を検討した際に何度も言及した「ハウカ」は、こうしたグループの1つである。ホッレイは「ガンジ（ganji）」と言われることもあり、この語はソンガイにとって人の住む領域（町、村、集落）に対置された、その外部の荒野を意味しており、ホッレイはそこに通常は人には見ることができない集落を形成して、人と類似した社会生活を送っている。つまり「ガンジ」はホッレイを指す換喩表現でもある。ソンガイにとって荒野は、人間ではない、人智を超えた力を持つ、不可視の様々な存在が住まう異界でもある。そのためホッレイは、ソンガイにとって人の世界に対置された野生の力を象徴していると同時に、人に似て社会的な存在でもある。

実際のところ、荒野に住まう非－人間的存在はホッレイだけではない。ホッレイは人を襲って病を引き起こすが、こうした心身の不調はイニシエーション儀礼によってホッレイとの関係を安定化させ、この対象者を霊媒に変えることをつうじて、巫病として対処することができる。しかし荒野には、いかなる対処も不可能な狂気をもたらして人を死に至らしめる邪悪な精霊も存在している。こうした邪悪な精霊と区別されたホッレイは、人のそれと類似した社会生活を営んでいるがゆえに、人にとって交渉可能であり、加護を求めることもできる存在である。そのため少なくともソンガイの事例に関しては、ある精霊がいかに不吉な存在として語られるとしても、それが精霊憑依の実践に関与している精霊である限りは、例外なく両儀的な存在である。

ここで注意すべきは、精霊に対置された人、並びに精霊の世界に対置された人の世界が、あくまでもソンガイからみた人間すなわちソンガイ自身であり、人間世界すなわちソンガイ社会であることである。このことは、ハウカがソンガイにとってどのような精霊であるかのみならず、人と精霊の相互行為の可能性と意味にも関わっているため、少し詳しく説明したい。

まず精霊ホッレイが非－人間であることは、ソンガイに対置された他者すなわち非－ソンガイであることとほとんど同義である。このことは、精霊ホッレイがハウサ、フルベ、トゥアレグ、ヴォルタ系民族などの隣接民族や「白人」として特徴づけられているのみならず、「中国人」や「インド人」といったエキゾチックな精霊についての語りにも表れている。ホッレイの人智を超えた力は、野生の力の源泉であり異界でもある集落の外部に由来しているために、こうした他者性はソンガイ＝人間を超えた力と結びつけられていると推測される。この観点からは、精霊憑依とはソンガイにとって他者が有している人智を超えた力、すなわち野生の力を活用する実践と言える。

他方で精霊の世界には、ソンガイの社会世界と同様の社会関係、すなわち類似した姻縁と血縁、奴隷と主人の関係、友人関係、年長者と若年者の関係などが存在している。そのため人と精霊が参加する相互行為としての精霊憑依の実践では、精霊と人のみならず、精霊同士や実践者同士の相互行為は、これらの関係に付随する規範・価値すなわち道徳性に準拠することが期待されている。そして、ソンガイの精霊憑依の実践において、エドゥアルド・コーンがアマゾン川上流域に住むルナについて「重要な関係づけの手法」として語った捕食関係に類するような重要な関係の「形式」に相当するのが、庇護－従属関係であると思われる[13]。霊媒が精霊の「子」、「奴隷」と呼ばれることが典型的に示しているように、基本的に精霊と人はそれぞれ庇護者と従属者に位置づけられているが、この関係は精霊同士の間にもみられる（cf. 2-2）。

ソンガイにとっていわゆる「憑依」とは、彼らの「魂」あるいは「影」と訳しうる「ビア（bia）」が、ホッレイと完全に置き換わった状態である。そのため、憑依されている間に起きたことを霊媒は何も覚えていないとされ、また精霊の意志は霊媒の意志と峻別されている。

2-2　精霊ハウカ

既存の研究では、ホッレイの世界を構成する様々な精霊のグループが詳細に記述されてきた（Rouch 1989; Stoller 1989）。しかしバマコでは精霊の分類は単純化されて、単に「古い」／「新しい」で区別される傾向がある。この区別は、基本的には精霊がいつからソンガイに知られているかという基準に拠っており、最も古くから知られている「トール」が前者を代表し、20世紀前半に現れたハウカが後者を代表している。こうした分類を考慮すると、ハウカが強力な精霊とされている理由はその新しさ、つまり出現した時代が比較的新しいという事実と関係していると推察される。上述のように、精霊の力は精霊の他者性と結びつけて認識されている。つまり新しい精霊であるハウカは、ソンガイにとっては出現した時代の新しさゆえによりエキゾチックな存在であるぶんだけ、強力な精霊として認識されていると考えられる。

興味深いことに、この古い／新しいという区別は、人間の年長者と若年者の区別に重ねられている[14]。トールに属する精霊は人間の年長者と同様に最も敬意を払われている一方で、容易には霊媒に憑依しないと言われているのに対して、ハウカは容易にやって来て人々が抱える問題の解決などの仕事をこなす存在のようにみなされている。そのためハウカの力とは、精霊の世界における若年者という地位と結びついた実用的な力でもあると考えられる[15]。

以上から、ホッレイ・カルトの実践者たちの視点を重視する立場から言えば、バマコにおけるハウカは地域の植民地化という歴史的状況とは関係がなく、むしろソンガイにとっての非－人間＝他者としての精霊の在り方、及び精霊の世界と人間（ソンガイ）の世界の対立と類似を特徴とする、人里とその外部から構成された二元的世界観が色濃く反映された存在だと言える。要約すると、同時代のソンガイにとってハウカとは、その出現時期の新しさゆえに他者性が強

い一方で、精霊の世界の若年者に相当し、それゆえに実用的な力が強い精霊である。少なくとも今日では、精霊のカテゴリーとしてのハウカ[16]は、このような精霊としてソンガイにとって意味・価値を有していると考えられる。

2-3　バマコでの実践の特徴

農村や地方の小都市では、ホッレイ・カルトは従来、基本的には屋外で「ジンマ」と呼ばれる祭司が組織する「ホッレイ・ホーレイ（holley hoorey）」[17]（精霊の遊び）と呼ばれるセアンスやイニシエーション儀礼などの活動を中心に、不特定多数の観衆を集めて実践されてきた。これらセアンスや儀礼では、藁と木材でできた日除けの下に楽師が陣取り、参加者（霊媒ではない人々を含む）がその対面の踊り場に自由に進み出て、曲に合わせて踊りを楽しむ。演奏と踊りが繰り返されていくなかで精霊が霊媒に憑依し、ジンマを中心に精霊との対話が行われる。ホーレイは特定の精霊との対話を求めて組織されることが多いが、通常、その場にいる霊媒たちにも他の精霊が降臨する。

しかしバマコでは、依頼に基づいて祭司の役割を演じる人物が手配する小規模なホーレイの方が、最も権威が認められたジンマが自宅の中庭で多くの観衆を集めて実施するホーレイよりも開催頻度において上回っている。典型的には、こうした小規模なホーレイは個人的問題の解決などのために精霊との対話を望む依頼人の家の室内や中庭で、必要な霊媒（依頼人が対話を望む精霊の霊媒）と依頼人の家族など少数の参加者だけを集めて実施される。

バマコにはガオ地方とトンブクトゥ地方を中心に様々な地域から実践者（霊媒であるか否かを問わず、精霊に親しみがあり、ホーレイにやって来る人々）が集まっており、精霊や儀礼についての知識に関して、人々の間で食い違いが確認されることが少なくない。また、概して霊媒たちは自分のイニシエーション儀礼を実施した祭司ジンマを自らの師とみなすために、農村ではジンマを中心とした霊媒たちの集団が形成されているが[18]、バマコには大多数の実践者たちにリーダーと認められているジンマ1名が存在しているものの、様々なジンマを師とする霊媒たちが集まっているために、誰が構成メンバーかが明確な集団が形成されているとは言い難い。実践者たちが、バマコ市の各所と郊外に分散して居住していることも、彼らの団結力の弱さに拍車をかけていると考えられる。

第３章　事例の検討

本章では、バマコで観察されるソンガイ移民の精霊憑依の実践に関して、関与するアクターにとって重要なコンテクストを明らかにするために、彼らが自身の経験や認識に基づいて実践し、その結果を再び将来に投影していくという意味での再帰性が明白に現れている側面について事例をとりあげて考察する。具体的にはそうした側面として、人と精霊の相互行為の過去の実践への強い依存性、相互行為の蓄積に立脚して特定の霊媒と特定の精霊が結合する傾向、並びに、実践において相互行為のコンテクストについての認識が問題になる場合に注目する。

3-1　実践の経験主義的傾向

最初にとりあげる事例は、精霊憑依の実践がいかに実践者個人の経験に密着しているかを示すものである。

事例1：アルハジ[19]の不満

バマコに住むソンガイの精霊憑依の実践者たちの間では、マンデ系民族の精霊憑依カルトであるジネ・ドンの祭司の女性が催す新年祭に参加して、そこでホーレイを催すのが慣わしになっていた。このバンバラ人[20]の女性は、自身がイニシエーションを施した霊媒たちの集団を率いていたが、若い頃にはホッレイ・カルトの活動に参加し

ており、ソンガイの実践者たちと交流を続けていたために、彼らを自分たちの新年祭に招待していたのだった。

この新年祭を観察した筆者に同行したアルハジは、その日にソンガイが催したホーレイには大いに不満があった。その場に降臨したハウカの女性の精霊マディーナは、それまでに何度も対話したことがあったにもかかわらず、彼を認識しなかったからである。アルハジがそれまでに対話していたのは、別のバンバラの女性祭司が自宅で毎週金曜に開催している集会に定期的に来るソンガイの霊媒に憑依するマディーナだった。この金曜日の集会では、精霊は「お前のマディーナだよ」と彼に話しかけていた。しかしその日の新年祭のホーレイで別の霊媒に憑依して現れたマディーナは、彼に初めて会ったかのように振る舞っていた。だから、彼にとって新年祭に現れたマディーナは偽物に他ならなかった。

筆者の調査によれば、バマコには精霊マディーナの霊媒は複数存在しており、そのうち最も熱心に活動しているのは、アルハジが普段対話しているマディーナが憑依するソンガイの霊媒ウスマンである。ところが事例の新年祭で彼が対話したのは、別の霊媒に憑依したマディーナだった。そのためある意味では、この日にマディーナが彼を見知っていなかったのは当然とも言えるのだが、彼にとって真実のこの精霊は、あくまでそれまでに蓄積された相互行為の経験に立脚した存在でなければならないのである。

同じ精霊の霊媒が複数存在している場合が少なくないバマコでは[21]、実践者たちは同一であるはずの精霊（同じ名前の精霊）が実際には憑依される霊媒によって振る舞いにおいて異なっていることを経験的に知っており、誰に憑依するどの精霊が信頼できるというような評判が彼らの間で聞かれることがある[22]。このことは、精霊は実践の次元においては精霊体系の次元で特徴づけられた一般的な存在であることを止め、霊媒ごとに個性を獲得すること（Goldman 2007; 古谷 1992）のみならず、こうした精霊の個性化には特定の霊媒に憑依した精霊との相互行為の経験に基づいた信頼がともなう場合があることを意味している。アルハジが特定の霊媒に憑依するマディーナを真正とみなすのは、過去の相互行為が彼にとって肯定的なものだったことも一因であり、そうした肯定的な相互行為が期待できなかったことが、彼にとって別の霊媒に憑依したマディーナが偽物と判断された要因だったと考えられる。

かくしてこの事例からは、実践者たちが自らの経験に応じて同じ名の精霊を区別しつつ、そのように個別化された特定の精霊との関係性を生きており、こうした区別が実践の意義を左右していること、並びに、実践者にとって重要な相互行為のコンテクストは、未来へと投影された精霊との相互行為の蓄積によって構成されていることがわかる。次にみるように、精霊がこのように区別される傾向は、特定の実践者にとって特定の精霊が特定の霊媒と結び付けられて不可分になる傾向につながっている。以下、特定の精霊が特定の霊媒と分かち難く結合している場合、この結合体を「精霊－霊媒」と表現する。

3-2　精霊－霊媒

バマコのホッレイ・カルトの実践者たちの間では、特定の精霊のために経済的な貢献をする人物が「アルカーシ・カリ（alkaasi kali）」（字義的には、「税を負担する者」）と呼ばれていた。こうした貢献はこの人物と特定の精霊との間の特別な紐帯に基づいているため、この人物はこの精霊の篤信者と言える。この関係は、ソンガイ社会における従属者とその経済的な貢献に対して庇護を与える有力者の間の関係をモデルとしていると考えられる。

筆者の現地調査では、当時、こうした人物は

2名知られていた。彼らはともに霊媒ではなく、バマコの実践者たちの間では経済的条件に恵まれており、彼らが信頼する精霊の求めに応じて、ホーレイの開催のために出資したり、他の実践者に贈り物をしたりしていた。調査中、2名のうち1名は定年退職後だったこともあり、経済的な貢献を停止していたが、もう一方の篤信者である会社員のブカリは活発に活動に参加していた。

ブカリが信頼していた精霊は、ハウカのマディーナである。マディーナは、同じくハウカに属し、バマコでは良く知られた精霊の1つであるコマンダン・ムグーの妻とされている。これらはいずれも「白人」の精霊であり、客観的にみればフランスによって地域が統治されていた状況から出現した精霊に他ならない。「コマンダン（commandant）」は植民地期の行政単位セルクル（cercle）の長を意味しており、既存の研究では、ハウカが出現した当時に霊媒たちを罰した当時のニアメのコマンダンが精霊コマンダン・ムグーのモデルになったとされている（Rouch 1989: 92）。しかし調査当時のバマコでは、そうした歴史的起源の痕跡はこの精霊の粗暴な振る舞いに刻印されていると言えるとしても、これらの精霊のいずれについても、人々の認識の次元では歴史的起源との関連は確認されなかった。

事例2：精霊－霊媒への信頼

ガオ市出身のブカリは、ハウカの精霊マディーナの「アルカーシ・カリ」である。ブカリは、この精霊の霊媒であるウスマンが参加するホーレイには必ず現れてこの精霊と対話し、また時にはこの精霊の求めに応じてホーレイの開催に必要な費用を負担していた。彼がこの精霊を信頼するようになったのは、結婚前に将来の妻と同棲していた時期に、彼女をフランスに連れて行って一緒に暮らすことを望んでいたあるマリ人男性の計画を、マディーナが阻止した事件がきっかけだったという。

筆者がこの精霊との関係について尋ねていた時、ブカリは「マディーナがそうしろと言うなら、本当ではないとしてもそうする」と語気を強めて断言した。この言葉は、一部の霊媒がマディーナの名を語って彼に金銭を要求することがあるという文脈において述べられたため、「本当ではないとしても」とは憑依が偽装される可能性について述べたものと考えられる。ブカリが対話するマディーナは、実質的には常にウスマンに憑依している。そのためこの発話は、精霊マディーナが発している（とされる）言葉が、実際には憑依を偽装しているウスマンのものであろうと、その違いはブカリにとって問題ではなく、彼はその言葉を信じるのだという断言だったと解せる。そしてブカリは、それについて第三者に異論を許さないのである。

この篤信者の事例が示しているのは、熱心にホッレイ・カルトの活動に参加して多くの経済的貢献をしている人物であっても、憑依が偽装される可能性を十分に意識していることのみならず、精霊と霊媒がともに信頼できる場合には、憑依が真であるか偽であるか（以下、「憑依の真偽の問題」）は、実質的に意味をなさなくなるということである。直接引用した「マディーナがそうしろと言うなら…」という発話を合理的に理解するには、バマコで知り合ったブカリとウスマンは共にガオ地方の出身であり[23]、同世代（ともに40代）であること、そして精霊憑依の実践の枠外においても友人同士と言えることは無視しえない。実際のところ、篤信者が特定の霊媒に憑依する特定の精霊を信頼し、篤信者とこの霊媒が同性で同世代の友人同士であるという点は、もう1名の篤信者の場合と共通する事実だった。

すなわち、特定の霊媒（ウスマン）に憑依した特定の精霊との相互行為が繰り返された結果、

篤信者にとってこの特定の精霊は特定の霊媒と結びつけて認識されており、この点において、この事例は先のアルハジの事例と同様であると考えられる。そして篤信者の場合には、両者が一体化した精霊－霊媒への信頼が堅固になっているがゆえに、この精霊－霊媒との相互行為において憑依が真であるか偽であるかは問題にならないのである。

かくして篤信者の事例でも、精霊憑依が有意に実践されるという事態は、実践の連続性を保証する蓄積された精霊との相互行為の経験のコンテクストに大きく依存していることが確認される。しかし先の事例と異なるのは、この事例では社会生活における篤信者と霊媒の間の蓄積された相互行為の経験のコンテクストも、精霊憑依の実践の意義に関わっている点である。憑依の真偽は観察者にとって確認が不可能であり、憑依には常に偽装される可能性があることを考慮すると、社会生活において霊媒に対して醸成された信頼は、精霊憑依の実践において精霊に対して醸成された信頼と、互いを強化する関係にあると考えられる。

さらに、先の事例とは異なる点として、「アルカーシ・カリ（貢納者）」という有力な庇護者と経済的に貢献する従属者の関係を示唆する呼称が示しているように、この事例では人と精霊の相互行為が良く知られた社会関係を範としていることも指摘できる。この事例は、人と精霊の関係性は蓄積された相互行為の経験のコンテクストと強く結びついている一方で、社会関係の類似を特徴とする人の世界と精霊の世界の在り方に立脚していることを明示しているのである。

3-3　2つの相互行為のコンテクストの錯綜

特定の精霊が特定の霊媒と結びつけて認識される傾向は、筆者の現地調査によれば、特殊な少数の事例に限られるものではない。そのため、精霊が実質的には精霊－霊媒となるがゆえに憑依の真偽が問われなくなることも、決して例外的ではない。以下にとりあげるのは、人々と精霊の相互行為の場において、憑依の真正性が疑わしいものの、真偽の区別が意味をなさなくなる事例である。この事例では、ホーレイの場においてどのようなコンテクストが有意であるかが示され、それに準拠して相互行為が展開するという点で再帰性が明白になっている。

事例3：2つの「結婚」

ここでとりあげるのは、自分の娘の婚約の成立を精霊に感謝するために、ある女性が開催を依頼したホーレイの事例である。

ハウカの精霊マディーナの霊媒であるウスマンの妻メイムナには、前夫との間にもうけた娘マンマがいた。良縁に恵まれてこの娘の結婚が決まった時、メイムナは精霊マディーナに対して感謝の意を表すために、ホーレイの開催をバマコで最も権威のある祭司ジンマに依頼した。彼女がそれまでマディーナと対話していた時にこの精霊が憑依していた霊媒は夫のウスマンであり、このホーレイでマディーナが憑依していたのも彼だった。そのためこの事例では、依頼者は自分の娘の婚約の成立を感謝するために、自分の夫に憑依した精霊と対話したのだった。

ジンマの自宅の中庭で多くの観衆を集めて開催されたこの日のホーレイでは、3つのハウカの精霊が降臨したが、ジンマを介して対話したのは主にマディーナとメイムナであり、対話の内容は娘のマンマの2種類の「結婚」に関するものだった。この対話においてマディーナは、マンマが既に別の妻がいる男性と結婚するに際して、結婚生活において生じる困難から身を守るために、男性の精霊と「結婚」してその加護を受けなければならないと主張した。マンマはイニシエーション儀礼を経験していないが、精霊マディーナに憑依されることがあった[24]。

マディーナが要求したのは、自分の夫の精霊であるハウカのコマンダン・ムグーと自分の霊媒であるマンマの象徴的な「結婚」、すなわち両者の間の紐帯の創出のために、後日、別のホレーイを開催することだった。

マディーナ（以下MD）:「マンマが嫁いだ時、共妻[25] か他の誰かが彼女を好きなようにするとすれば、私がこの馬（霊媒）に降りる（憑依する）ことはもうなくなるだろう」。

マディーナはメイムナと付近にいた人々に「ウスマンを知っているか？」、つまりマディーナが憑依している霊媒のウスマンを知っているかと問い始め、それからマンマと男の精霊（コマンダン・ムグー）の「結婚」のホーレイについての指示を人々に与えた。

メイムナ：「よく知っています」。

ジンマ（以下Z）：（笑いながら）「彼女（メイムナ）はマディーナしか知らない」。

MD：「その日に羊を1頭持ってくるよう、ウスマンに言いなさい」。

[…]

MD：「ウスマンが羊を持ってくるのは、私のためでも人々のためでもない。『コトマ』（同じ精霊の霊媒）のマンマのためだ。コトマが縛られていたら、可能であるなら人はこの者を自由にしてやらなければならない」。

Z：「それこそ善き精霊の道だ」。

[…]

MD：「羊と米を持ってくるのはウスマンだ。彼はこの日のために全てを負担する」。

（人々が拍手）

Z：「マディーナは言った。もしコトマに何か起きれば、不可能でない限り助けなければならない」。

（人々が拍手）

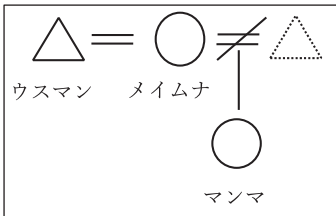
[…]

Z：「マンマ、私はお前を白人（anaasaara）のようにしてやろうと言った。今では、お前は私よりも白人のようだ」。

この事例では、精霊マディーナがウスマン（精霊が憑依している霊媒）について周囲に問いを発し、ジンマが笑いながら「彼女はマディーナしか知らない」と述べている場面が示すように、憑依の真正性が危うくなっており、そのことは参加者（の少なくとも一部）に意識されているように思われる。このホーレイが始まる前に筆者がジンマに挨拶した時、彼は「今日はお芝居だな」と言っていた。霊媒の妻とその霊媒に憑依した精霊が、娘の結婚に関して対話するという出来すぎた状況は、参加者たちにこの対話が実際にはウスマンとメイムナのものではないかと疑わせるに十分だったはずである。しかし、人々と精霊の対話においてはこうした憑依の真正性の危うさは表立っては問題になっておらず、最後の人々の拍手からはむしろ彼らがこのホーレイの展開に満足していたことがわかる。

また、最後に引用した言葉からは、マディーナが「白人」の精霊であることが確認されるが、「白人」であることは抵抗や風刺の対象というよりも、むしろ肯定的な意味合いを持っていることは明らかであり、おそらくは物質的豊かさを象徴していると思われる。

「コトマ（kotoma）」とは、元来は同じ主人に仕える奴隷を指す言葉であり、霊媒が精霊の奴



＊事例ではウスマンに憑依した精霊がメイムナと対話している。ウスマンとマンマは「コトマ」の関係にある。

隷と呼ばれるように、ホッレイ・カルトの文脈では同じ精霊の霊媒を指す。主人と奴隷は、それぞれ庇護者と従属者の立場にある。同じ従属関係を生きる者同士として、同じ精霊の霊媒同士は同じ主人の奴隷同士のごとく、諍いを避け、助け合うことが求められている（Olivier de Sardan 1982: 258）。そのため人々の満足は、まずは主人の地位にある精霊が自身の従属者（マンマ）に対する配慮に基づき、かつこうした規範に則って（「善き精霊の道」）、一方ではこの従属者のために自身と特別な紐帯のある他の精霊（夫であるコマンダン・ムグー）との紐帯の形成（「結婚」）を準備し、他方では他の霊媒（ウスマン）に相互扶助を要求したことに対するものと解される。

その一方で、上述のようにこの事例では憑依の真正性が半ば公然と疑わしいものになっているため、発話の主が精霊マディーナではなく霊媒のウスマンである可能性も観衆にとっては排除されていないはずである。この場合、人々が満足したのは義理の父が義理の娘のために上述の「結婚」のホーレイの開催を提案し、必要な費用を負担することを申し出たためと理解される。

以上から、この事例では憑依が真であれ偽であれ、いずれにしてもホーレイの展開が人々の期待に適ったものであることがわかる。彼らの満足は、憑依の真偽には左右されていない。このことは、精霊と人が類似した社会関係を有しているゆえに、それに付随する価値・規範すなわち道徳性においても類似していることによって可能になっているはずである。この事例では、人同士の社会生活というコンテクストと、人と精霊の相互行為（精霊憑依）というコンテクストが重複し、それらの区別が曖昧になっていると言える（内田 2021）。

観衆を含めた参加者たちが満足するように展開したこのホーレイの事例は、事例2と同様に、実践者たちは憑依が偽装される可能性のみならず、憑依の真偽が時に重要ではなくなることも意識していることを示している。こうした憑依の真偽の問題の意味の喪失は、上述のように、憑依が真であろうと偽であろうとアクターらの相互行為に肯定的な意味があるという事態に由来しているはずである。さらにこの事例の場合には、憑依の真偽が曖昧であるほうが、上述の2つのコンテクストのいずれにおいても相互行為に肯定的な意味が確保される可能性が考えられる。憑依は常に偽装される可能性があることを、以上と考え合わせると、精霊憑依の実践には潜在的にこれら2つの相互行為のコンテクストが関与していることが実践者たちには認識されており、実践においては時にこれらは操作されうるものと考えられる。

こうした操作の可能性は、一方では憑依の真偽とは無関係に、実践者の都合によって精霊憑依が実践される可能性があることを意味している。しかし他方では、この操作は人と精霊が類似した社会関係を有しており、精霊と人は対置されると同時に類似してもいるという実践者たちの世界観に基づいている。さらに、2つの相互行為のコンテクストの錯綜と操作は、彼らの二元的世界を再帰的に道徳的なものにしてもいると言える。

なお、筆者は直接に観察することはできなかったが、後にあるインフォーマントから聞いたところによれば、この事例で精霊マディーナが要求したホーレイは、後日、ウスマンの経済的負担によって開催され、その時にある老人に憑依したコマンダン・ムグーが、マンマとの「結婚」に同意したとのことである。

3-4　考察：大都市における秩序

以上の議論をうけて本節では、最初に実践者にとって有意な実践のコンテクストがいかなるものかという問いに関して、事例の分析から得られた知見を纏める。次いで、得られた知見を本論の視座から異郷の大都市というコンテクストに位置づけて考察する。

とりわけ最初の2つの事例をとおして注目され

る本論の研究対象の特徴は、実践の個人的経験との強い結びつきである。この傾向は、憑依が偽と判断される根拠や、憑依の真偽の問題が無意味になる要因になっていたことからも、当該実践者にとっての実践の意味を左右していることがわかる。これらの事例は、実践の意味が相互行為の蓄積に立脚した人と精霊の関係性に関わっていること、並びに、この傾向に基づいて精霊と霊媒が結びつけて認識されることを示していた。

事例3が示しているように、こうした相互行為の蓄積に基づいた精霊と霊媒の結合ゆえに生じる社会生活のコンテクストと精霊憑依のコンテクストの重複・錯綜という現象も、この実践の意味と結びついている。事例2と3からは、人と精霊、及び精霊憑依に関与する者同士の相互行為は、人の世界と精霊の世界の間で類似している社会関係に付随した道徳性に準拠することが期待されていることがわかる。これらのコンテクストは、それぞれ人と人、及び人と精霊の相互行為を有意にするものだが、憑依の真偽の曖昧さは、ホーレイにおけるアクターの相互行為がこれら2つのコンテクストのいずれにおいても有意になることを可能にすると考えられる。そして、2つのコンテクストを横断して人と精霊の相互行為が実践者たちにとって意味をもつという事態は、彼らの世界観によって可能になっている。これらコンテクストに依拠した実践は、人と精霊の区別と類似を特徴とする実践者の世界観と相関関係にある。

以上から、関与するアクターの間で重要な相互行為のコンテクストとして、蓄積された相互行為の経験と、ソンガイの二元的世界観に立脚した錯綜する傾向がある社会生活と精霊憑依のコンテクストが指摘される。これらコンテクストは、精霊ハウカに関して先行研究で注目されてきた地域の植民地支配という歴史的状況との関連が見出しにくい一方で、事例1の分析における複数の霊媒の存在を指摘した考察が示唆していたように、異郷の大都市という状況とは無関係ではないように思われる。この観点では、これらコンテクストが実践者たちにとって重要であるという事態は、バマコでホッレイ・カルトを実践しているソンガイ移民たちにとって、どのような意味があると解釈できるだろうか。先にネオ・サイバネティクスの概念を参照して設定した視座に沿って言い換えると、上記コンテクストが実践者たちにとっての「情報」（意味、価値）と密接に結びついているなら、これら「情報」が都市環境において重要であるという事態から、何を読み取ることができるだろうか。

既述のように、バマコでは主としてガオ地方とトンブクトゥ地方に由来する出身地を異にする人々が、ホッレイ・カルトの実践を共にしている。また霊媒たちは、イニシエーションを施したジンマが異なるために自身の師とみなす人物が異なっている。これらは、バマコの実践者の間で、精霊や儀礼に関する知識の次元で多様性や齟齬がみられる要因になっていると考えられる。バマコでは基本的には同一の精霊が憑依する霊媒が複数存在しており、霊媒ごとに精霊の個性が異なっていることも、精霊に関する知識の多様性や齟齬の一因であるはずである。さらに、霊媒を中心とする実践者たちからリーダーと目されたジンマの権威が相対的に弱いことも、こうした多様性や齟齬を増幅させていると推察される。

こうした状況を背景として、先に指摘した1つ目の特徴である実践者個人の独自の経験との結びつきが強い傾向、すなわち蓄積された相互行為の経験というコンテクストへの依存性が強い傾向は、まず特定の精霊－霊媒との相互行為を中心とする実践の一貫性につながっていると考えられる。こうした相互行為の蓄積自体に基づいた特定の精霊－霊媒との関係性の継続は、ホッレイ・カルトに関する知識の他の実践者たちとの共有を必要とせず、むしろ知識に関する様々な差異を排除しながら、実践者それぞれにとっ

て実践を秩序だった有意なものにしていくはずである。事例1でアルハジが示していた不満は、彼にとってのこうした一貫性が、異なる霊媒に憑依した精霊マディーナによって潰乱されたことに起因しているものとして解せられる。

既述のように、実践の連続性には同時に特定の精霊－霊媒との紐帯の形成を促す傾向がある。事例2と3にみられたように、特定の精霊－霊媒と人との親密な信頼関係は、実践が積み重なることによって発展するものであろう。そのため、相互行為の積み重ねによって確実になっていく実践の一貫性は、関係性の形成と強化の基盤になると同時に、社会生活の領域と精霊憑依の領域を横断して精霊と霊媒の結合を促進するはずである。さらに、精霊が自分の篤信者に対して誰かへの贈り物や、誰かのイニシエーション儀礼への出資を求める場合があること、並びに、事例3の男性の精霊との「結婚」のエピソードを考え合わせると、個人と精霊－霊媒の関係性には、人同士や人と精霊の結びつきを広げてゆく可能性があることがわかる。かくして、精霊と霊媒の結合、及び人の世界と精霊の世界の区別と類似に基づいた、社会生活と精霊憑依のコンテクストの重複と錯綜は、精霊憑依の実践をつうじて、人の世界と精霊の世界を横断した紐帯を形成し、発展させる可能性につながっていると言える。

このことを、実践者たちの間には交流があるものの、その多くは日常生活を共にしているわけではなく、彼らが血縁・姻縁や地縁が集積している農村とは異なる環境に生きていること、並びに霊媒たちの団結が弱いことと考え合わせると、このように2つのコンテクストが重要性を付与されている精霊憑依の実践には、都市における関係の不在や曖昧さの克服を促進する働きがあると考えられる。かくしてこの実践には、モデルとしての二元的世界観に準拠しつつ、人と精霊の世界を秩序あるものとして再帰的に構築していこうとする側面があることを指摘できる。以上の考察からは、関与するアクター（人、精霊）の相互行為の蓄積、並びに道徳性に立脚した関係性の創出と整序をとおして、人と精霊の領域がその一部を構成している二元的世界を大都市の只中で生きようとする実践者たちの姿が浮かびあがる。

おわりに

本論で関連する事例をとりあげてきた精霊ハウカは、歴史的、客観的には植民地体制に対する反応として出現した精霊のグループと考えられ、既存の研究はこうした歴史的、政治的コンテクストを重視して、主に植民地体制に対する民衆の抵抗の事例としてこれを解釈してきた。実際のところ、ハウカは植民地体制と結びついた役職や人物（司令官、書記、軍医、運転手など）の特徴を持つ精霊で構成されていることからも、これらの精霊が地域の植民地化という歴史的出来事から着想されたことは疑いえない。また、本論でとりあげた事例2にも表れていたように、ホッレイ・カルトの実践者たちの間でも、ハウカは「白人」の精霊と言われることが多い。

しかしながらこの事例は、「白人」は参加者のソンガイたちにとって敵対的な存在であることも、ユーモアをもって風刺すべき存在であることも示してはいない。さらに、「白人」というハウカの特徴づけは、人里に住む人間（ソンガイ）に対して、その外部に住む異民族としての、すなわちエキゾチックな他者としての精霊ホッレイ一般の特徴づけと同種のものでもある。調査時のバマコでは、他の精霊と異なったハウカの特徴は、出現した時代の新しさゆえに他者性が強く、精霊の世界の若年者として位置づけられているために、容易に人の世界にやって来て、問題を解決する力が強い実用的な精霊という点にあると考えられる。「ハウカをドンゴが養子にした」あるいは「ハウカをドンゴが助けた」という言説は、ハウカを精霊世界の従属者（＝年少者）に位置づけるものと解せるため、本論の

解釈はこれら言説によっても支持されている。ハウカは他の精霊と全く同じではないものの基本的な特徴を共有しており、違いは他者性の強さ、及びソンガイ社会に類似した精霊世界で占めている地位にある。この意味ではハウカの特徴は、ソンガイにとっての世界の在り方と不可分である。

実践者にとって重要なコンテクストに関する本論での事例の分析は、実践の次元ではハウカ（マディーナ）は紐帯の形成をつうじて加護を求めるべき存在であることを示しており、この精霊はこの点では他の精霊と変わらない。ホッレイ・カルトの実践においては、精霊と人（霊媒）との蓄積された相互行為の経験のコンテクスト、並びに二元的世界観に立脚した錯綜する傾向がある社会生活と精霊憑依のコンテクストが重要であるという点においても、ハウカが他の精霊と異なっているとは考えられない。これらのコンテクストが重要であることは、人と精霊の間で類似した道徳性を特徴とする二元的世界観に依拠し、これを将来に投影しつつ、実践の連続性をつうじてアクターの間の紐帯を創出し整序することが、バマコのホッレイ・カルトの実践者たちにとって重要であることを示している。

以上から本論は、実践者の視点を重視する立場からは、調査地における彼らとハウカの相互行為において重要なコンテクストは、植民地期のハウカの出現に関するものではなく、実践者の相互行為の経験と二元的世界観に関するものであると考える。調査地で得られたデータに依拠する限りでは、実践者たちの認識において、ハウカが出現した歴史的状況は実践者の経験と世界観に立脚した実践において意味を失っていると推察される。かくして本論は、新しい精霊が出現した政治的状況などの相対的にマクロなコンテクストとの関連を重視してきた既存の精霊憑依研究に対して、観察者の視点と実践者の視点に応じて異なるコンテクストの区別を意識し、外部環境に対して自律的な実践主体にとっての意味と相関した主観的なものとしてコンテクストをとらえることによる、より実践者の視点に即して精霊憑依の実践を理解する可能性を示すことができた。

実践者の視点を重視した視座の構築の試みにおいて、本論ではネオ・サイバネティクス論を参照した。しかしながら、その際に依拠したのはそこに含まれている様々な理論に共通した基本的な考え方にすぎず、また本論における事例の分析は、この基本的な考え方に基づいて構築した観点を、ハウカに関するいくつかの事例にあてはめたものにとどまっている。本論稿で素描した視座を発展させ、ソンガイの精霊憑依の事例により広く適用する可能性、並びに精霊憑依研究におけるその可能性を検討する作業は今後の課題としたい。

注

1）筆者はマリの首都バマコにおいてソンガイ移民が実践する精霊憑依を対象に、学位論文として民族誌を執筆している（内田 2021）。本論は、その執筆過程で得た課題との関連で、ネオ・サイバネティクスのいくつかの概念（後述）から着想された異なる観点から、同じ対象の一部を捉え直す試みである。そのため上記論文とは、先行研究の位置づけ方、ソンガイの世界観の捉え方、及び事例の解釈に関して議論が一部重複している。

2）本論が依拠している現地調査は、2011年10月から2012年11月、及び2013年10月に実施された。

3）本論では、行為者あるいは観察者にとっての意味に関わるものとして、「コンテクスト」を用いる。

4）システムの視点と言われているものがどのようなものかを理解するには、オートポイエーシス論を構想したマトゥラーナ（Humberto R. Maturana）とヴァレラ（Francisco J. Valera）が用いた比喩が有用であるように思われる。以下で言われているパイロットの視点がシステムの視点に相当する。「生命システムで生じていることは、飛行機で生じていることに似ている。パイロットは外界に出ることは許さ

れず、計器に示された数値をコントロールするという機能しか行わない。パイロットの仕事は、計器のさまざまな数値を読み、あらかじめ決められた航路ないし、計器から導かれる航路にしたがって、進路を確定していくことである。パイロットが機外に降り立つと、夜間の見事な飛行や着陸を友人からほめられて当惑する。というのもパイロットが行ったことと言えば計器の読みを一定限度内に維持することであり、そこでの仕事は友人（観察者）が記述し表わそうとしている行為とはまるで異なっているからである」（マトゥラーナ&ヴァレラ 1991: 231）。

5）生物が普遍的あるいは客観的な実在世界を生きているわけではなく、自身の局在化された世界を生きていると考える点では、ネオ・サイバネティクス論は人類学で注目された「環世界」（Ingold 2011; 石井 2017; ユクスキュル&クリサート 2005）の概念と類似している。

6）精霊ホッレイについては2-1での記述を、「ホッレイ・カルト」に相当するソンガイ語の表現については2-3での記述を参照されたい。

7）ストーラーと同じく、オリヴィエ・ド・サルダンは主にニジェールでソンガイについて調査していた。

8）オリヴィエ・ド・サルダンはこの「モラル」の具体的な内容として、儀礼の尊重と精霊のための供物や犠牲獣の提供の要求、並びに、家族内や近隣関係における揉め事に関する諫めを挙げている（Olivier de Sardan 1999: 249）。

9）以下の2-1と2-2での議論を参照されたい。なお「道徳」の語義については、「人間にとって望ましい行動」に関わっている点では「倫理」と同じだが、倫理は個人的で要求の水準が高いものでありえる一方、道徳は集団的・社会的で誰にでも実行可能であるという橋爪（2003: 17–18）の説明がある程度一般的な用法を示していると思われる。本論では、個人的な倫理ではなく、精霊と人に共通する一般的な社会関係及び付随する価値・規範に注目しているため、「道徳性」を用いている。

10）ジャン・ルーシュ（Jean　Rouch）は、ハウカとその後に出現した「ササレ」（かつての奴隷の村の名前に由来し、奴隷に特徴的とされる淫らな言動を特徴とする精霊のグループ）について、「これら宗教はある種の“集団的無意識”」であり、実践者たちは「していることを説明できず、彼らがそれについて考えていることを見せることしかできないのであり、それは1920年代から独立までは彼らは力、軍隊、行政、官僚の権力について考えてきたが、今ではセックスと死について考えていることを意味している」と述べている（Rouch　1978: 1010）。ゴールド・コーストにおけるニジェールから来たハウカの霊媒たちの実践を撮影した記録映画『狂気の主人公たち』では、イギリス軍やフランス軍の様々な形象が実践で活用されていることが注目されていることを考え合わせると、新しい精霊の出現がその時代の実践者たちの言語化されていない思考の現れであるという想定に基づいてこれら精霊に着目するルーシュの立場が、ストーラーらの後の研究に影響した可能性が推測される。

11）ルーシュは、精霊ドンゴがメッカに滞在していた時になした多くの子がハウカであるという説を紹介している（Rouch 1978: 1009）。

12）本節での議論は、より一般的な文脈に置き直せば、研究対象と時代背景との関連の問題ということになろう。日本思想史研究者の酒井直樹は、天皇制と近代との関連に注目した研究について次のように述べている。「天皇制は同時代の技術の水準に浸透され、その時代の社会学的条件内で機能していることは、否定しようもない事実に見えるのである。天皇制の諸制度が、技術の進歩と経済社会条件に規定された一定の空間のなかに置かれている以上、もし、その空間が近代的な特徴を備えているならば、空間的近接性の原則から、顔料を含む溶液に浸された布地がその顔料の色に染められるように、近代的な空間のなかで天皇制は近代性に染められる、というわけだろう。／だが、こうした「空間」「近接性」そして「時代の影響」は、歴史的過去のうちに、直接かつ即時的に存在しているわけではない。それは歴史的文脈化の作業で動員される歴史の語りの修辞なのである（酒井　1996:　135–136）」。ここでの酒井の批判を本論での議論のために敷衍すれば、精霊とそれが出現した時代状況との関連の在り方、あるいは同一地域（同一「空間」）での別の時代におけるこの精霊とその出現状況との関連の在り方は自明のものとして前提しうるものではなく、観察者の「文脈化」（コンテクスト化）作業の結果であると言えよう。こうした見地から本研究は、ハウカに関して実践者にとって重要な実践のコンテクストを明らかにすることを試みる。

13）ソンガイ社会を様々な対立的な地位のペア（家父長と従属者、戦士と農民、主人と奴隷など）から成る構造体として記述したオリヴィエ・ド・サルダンは、これらに「従属性」の観念が共通していることを指摘している（Olivier de Sardan 1984: 127–132）。ホッレイ・カルトの実践において、庇護–従属の関係性が重要であることは、こうした従来のソンガイ社会の在り方に由来していると考えられる。もっともこの関係性が重要であることは、後にとりあげる事例3が示すように、精霊憑依の実践で同じ地位にある者同士の水平的関係性が意味を持たないことを意味しているわけではない。

14）ニジェールでボリ・カルトについて調査したパジアン（Michela Pasian）も、実践者たちの間に「古い」／「新しい」という精霊の区別が存在していることを指摘し、霊媒はまず「新しい」精霊に憑依され、その後に「古い」精霊に憑依されるようになる傾向があることを報告している（Pasian 2010: 110–114）。筆者の調査では、ハウカの霊媒はトールの霊媒よりも平均年齢が低いことが確認されている（内田 2021）。

15）ソンガイ社会では、アフリカの他の多くの社会と同じく、年少者は年長者に代わって様々な労役や雑務を行う。

16）精霊の種類あるいはグループとしてのハウカは典型としてこのような特徴を有していると考えられるが、実践者各人にとって馴染みのある個別のハウカが具体的にどのような存在であるかについては、次章での事例の分析を参照されたい。

17）「ホッレイ・ホーレイ」は、ソンガイの精霊憑依に関する実践の総称として、「ソンガイの精霊憑依カルト」あるいは「ホッレイ・カルト」に相当する名称と言える。

18）この知見は、ホンボリ郡（commune de Hombori）における筆者の観察に基づいている。

19）本論での氏名は全て仮名である。

20）首都バマコに数多く居住している民族。

21）農村のホンボリ郡では、村のなかに特定の精霊の霊媒が1名しかいない場合が多い。そのため農村では、実践者が様々な霊媒に憑依する同一の（同じ名の）精霊と相互行為する可能性は、大都市よりも限られているはずである。

22）同一であるはずの（同じ名の）精霊が、実際には憑依する霊媒ごとに様々に異なっているという経験的事実は、イニシエーション儀礼の際にジンマが（将来の）霊媒に飲ませた「薬」の違いなどが原因であると実践者たちの間では理解されている。

23）ガオ市で生まれ育ったブカリは、大学進学のために首都にやって来た。

24）ホッレイ・カルトでは、イニシエーション儀礼を介して人と精霊の関係は安定化するため、この儀礼が実施されない限り、精霊は将来の霊媒に野放図な憑依の状態を引き起こすとされている。

25）一夫多妻制での妻の1人。

参考文献

欧文文献

Behrend, Heike and Luig, Ute (eds.)
1999 *Spirit possession, modernity, and power in Africa*. University of Wisconsin Press.

Bourgignon, Erika (ed.)
1973 *Religion, altered states of consciousness, and social change*, Ohio State University Press.

Comaroff, Jean and Comaroff, John (eds.)
1993 *Modernity and its malcontents: ritual and power in postcolonial africa*. University of Chicago Press.

Crapanzano, Vincent
1977 "Introduction". In V. Crapanzano and V. Garrison (eds.). *Case studies in spirit possession*. Wiley, pp. 1–40.

Dawson, Andrew (ed.)
2010 *Summoning the spirits: possession and invocation in contemporary religion*. I.B.Tauris.

Echard, Nicole
1992 "Culte de possession et changement social: l'exemple du bori haussa de l'Ader et du Kurfey (Niger)". Archives de Sciences Sociales des Religions, 79: 87–100.

Fuglestad, Finn
1975 "Les Hauka: une interprétation historique". Cahier d'études africanistes, 15(58): 203–216.

Goldman, Marcio
2007 "How to learn in an Afro-Brazilian spirit possession religion". In D. Berliner and R. Sarró (eds.). *Learning religion: anthropological approaches*. Berghahn, pp.

103–119.
Hüwelmeier, Gertrud and Krause, Kristine (eds.)
2011 *Traveling spirits: migrants, markets and mobilities*. Routledge.
Ingold, Tim
2011 *Being Alive: essays on movement, knowledge and description*. Routledge.
Krings, Matthias
1999 "On history & language of the "European" Bori spirits (Kano, Nigeria)". In Behrend, Heike & Luig, Ute (eds.). *Spirit possession, modernity, and power in Africa*. University of Wisconsin Press, pp. 53–67.
Masquelier, Adeline
2001 *Prayer has spoiled everything: possession, power, and identity in an islamic town of Niger*, Duke University Press.
2020 "A matter of time: spirit possession and the temporalities of school in Niger". Journal of africana religions, 8(1): 122–145.
Monfouga-Nicolas, Jacqueline
1972 *Ambivalence et culte de possession – contribution à l'étude du Bori haousa*. Anthropos.
Olivier de Sardan, Jean-Pierre
1982 *Concepts et conceptions songhay-zarma*. Nubia.
1984 *Les sociétés songhay-zarma* (Niger-Mali). Karthala.
1993 "La surinterprétation politique: les cultes de possession hawka du Niger". In J.-F. Bayart (ed.). *Religion et modernité politique en Afrique noire*. Karthala, pp. 163–213.
1999 "Paul Stoller, Embodying colonial memories. Spirit possession, power and the Hauka in West Africa". L'Homme, 39(149): 248–250.
Pasian, Michela
2010 *Anthropologie du rituel de possession Bori en milieu Hawsa au Niger*. L'Harmattan.
Rouch, Jean
1978 "Jean Rouch talks about his films to John Marshall and John W. Adams". American anthropologist, 80: 1005–1022.
1989 (1960) *La Regligion et la magie Songhay*, 2e éd.. Editions de l'Université de Bruxelles.
Stoller, Paul
1984 "Horrific comedy: cultural resistance and the Hauka movement in Niger". Ethos, 12(2): 165–188.
1989 *Fusion of the worlds: an ethnography of possession among the Songhay of Niger*. University of Chicago Press.
1995 *Embodying colonial memories: spirit possession, power, and the Hauka in West Africa*. Routledge.

日本語文献

石井美保
2017 『環世界の人類学―南インドにおける野生・近代・神霊祭祀』京都大学学術出版会。
内田修一
2021 「マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究」博士論文、総合研究大学院大学。
クラーク、ブルース・ハンセン、マーク
2014 「ネオ・サイバネティックな創発―ポストヒューマンの再調律」大井奈美訳、西垣通他編『基礎情報学のヴァイアビリティ―ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』pp. 173–204、東京大学出版会。
コーン、エドゥアルド
2016 『森は考える―人間的なるものを超えた人類学』奥野克巳他訳、亜紀書房。
酒井直樹
1996 『死産される日本語・日本人』新曜社。
竹沢尚一郎
2007 『人類学的思考の歴史』世界思想社。
西垣　通
2021 『新基礎情報学』NTT出版。
橋爪大三郎
2003 『人間にとって法とは何か』PHP研究所。
原島大輔
2022 「訳者あとがき」ユク・ホイ著、原島大輔訳『再帰性と偶然性』青土社。
古谷嘉章
1992 「〈個性化〉としての憑依」中牧弘充編『陶酔する文化―中南米の宗教と社会』平凡社。
2003 『憑依と語り―アフロアマゾニアン宗教の憑依文化』九州大学出版会。
マトゥラーナ、ウンベルト・ヴァレラ、フランススコ
1991 『オートポイエーシス―生命システムと

は何か』河本英夫訳、国文社。
ユクスキュル、ヤーコプ・フォン・クリサート、ゲオルグ
2005　『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫。
ルイス、ヨアン・M
1985　『エクスタシーの人類学』平沼孝之訳、法政大学出版局。

2022年9月30日　受付
2022年12月7日　採択決定